校歌を巡る断章

――校歌とＹＧＣ――

山城６回　野村　透

双ヶ丘に鐘鳴りて　流れさやけき桂川
御室のさくら咲き匂う　学びの家のたふとさよ
正義　真実　責任の命みなぎる　われら山城

二〇〇二年八月二十三日、円山公園南の料亭「嘉楽」（七回卒、畑中伸夫氏経営）に、およそ五十年ぶりに集まった四十六名のＹＧＣ（合唱部）部員は、涙にむせびながら懐かしい「山城高校」校歌を熱唱しました。

ＹＧＣは山城高校設立と同時に設立され、毎日新聞音楽コンクール関西の部で二位（公立一位）を受賞するなど当時活発な活動を展開していた名門クラブです。

毎年、新入生歓迎会ではまず「校歌」の歌唱指導をＹＧＣが担当し、山城高校の誇りを胸を張って伝えたものです。しかしながら、現在の山城高校ホームページのクラブ活動欄にはＹＧＣも合唱部も記載されていませんので、「校歌」はだれが伝え

ているのだろうかと心配しております。

五十年振りのＹＧＣ同窓会は、合唱部員の集まりですから当然歌に始まって、歌に終わるはずですが、年代は第一回から第十二回まで、地域も北海道から九州まで広がる参加者が共通して歌える曲は唯一、「校歌」でありました。それでも、曲がりなりにも思い出した現役時代の混声合唱のハーモニーは参加者を一瞬のうちに理想に燃えた若き青春時代に呼び戻し、あの東端の木造音楽室の練習風景を再現させてくれました。不思議なもので、一人で歌う時には「校歌」のメロディが自然に口をついて出ますが、合唱で歌う時にはちゃんと自分のパートの旋律が蘇ってきて合唱となります。これがまた当時の思い出を引き出して、高校時代の雰囲気が醸し出されるのです。

「校歌」のほかにリクエストが多かったのは、「Believe me!」というイギリス民謡で、これは第五回から第八回くらいまで故矢野文康先生にご指導頂いた曲です。その歌詞は、

青春の日は過ぎやすく、行きし日は返らず。
麗しき花の姿も、いつの日かしぼまん。
されど我はなれを愛す、とこしえの日までも。
限りなき愛の言の葉、信じたまえ我を。

というもので、卒業後五十年を経た今日、初めて実感として共感を覚えます。

当時は、この曲の美しいメロディが好きで熱心に歌ったのかもしれませんが、それにしても思春期の男女がこのような歌詞を切なく歌っていた若者の直感力に驚かされます。このＹＧＣ同窓会は、大好評ですぐ第二回の要望が強く出されまして、二〇〇四年十月には四十三名の参加を得て京都リーガロイヤルホテルで盛大に開催されました。この時は、第七回卒で同志社大グリークラブ出身、山岡寛次さんの「歌で綴る」進行により、和やかなひとときを過ごし、「校歌」を合唱して散会しました。今後も三年ごとに開催される予定ですので、ご興味を持たれる方は是非ご参加ください。連絡先はＹＧＣ同窓会名誉会長、第六回卒、神田輝夫（ＴＥＬ：〇七七―四五三―四二七七）です。

山城高校　校歌

山城高校校歌は　作詞　竹友藻風　作曲　中瀬古和　とあります。

一番は冒頭にかかげましたが二番の歌詞は次ぎのように示されています。

愛宕の峰に雲晴れて　日かげさしそう西の京
嵯峨野をわたる風清き　学びの園のめでたさよ
平和　協力　友愛の　光あまねきわれら山城

作詞者の竹友藻風氏は一八九一年（明治二十四年）大阪に生まれ、同志社大神学部、京都帝大を経て米国コロンビア大学で

英文学を専攻されました。氏は大正から昭和にかけて文学者、詩人として活躍され、その間多くの校歌も手がけられておられます。たとえば、昭和二十五年制定の兵庫県立星陵高等学校の校歌は次ぎの歌詞となっています。

空ははれたり我が上に　空が晴れたり我が上に
播磨の原の果て遠く　山々かすみ風清き
ここに正義と真実の　光り輝く星ヶ丘

最初の二行で地域の名所を描写し、そこで学ぶ理想を「正義」「真実」と掲げて若人を鼓舞する手法はよく似ていますが、深い歴史と文化を持つ京都山城高校の校歌には、より深い思い入れが加わっていると感じられます。

山城高校校歌の作曲は「中瀬古和」氏です。この作曲者は一九〇八年（明治四十一年）京都市生まれで、同志社女学校普通学部から米国・ワシントン大学、イーストマン音楽学校大学院で音楽を専攻され、ドイツ・ベルリン国立高等音楽院でP・ヒンデミットに作曲を学ばれました。その後、同志社女子大学教授の傍らピアノ、オルガンの演奏活動ならびに当時は珍しい女流作曲家として活躍されました。

中瀬古さんが師事されたP・ヒンデミットといえば、昭和の初期には「無調性音楽」を提唱して音楽革新を目指すほどの作曲家でしたので、中瀬古氏の作品も当然その影響を受けて、前

衛的手法が駆使されています。しかしながら、同志社女子大学史料室、中村恵先生の調べによりますと、「山城高校校歌」は、中瀬古氏の作風からするとかなり異色の（一般的な）ものになっているとの事です。

校歌の制定にあたって、どのような経過を辿ったのかは詳らかではありませんが、学制が改正され、新制高等学校が発足した当時にあって、最高の詩人と、新進の作曲家に委嘱され、両者とも立派にその趣旨に応えていただいたため格調高い校歌が残された事を心から感謝しますとともに、制定された当事者に敬意を表する次第です。

余談

作曲者の中瀬古和氏のご経歴につきまして、ご出身の同志社女子大学資料室、中村恵先生にお調べいただいた事は既にのべましたが、同史料室には中瀬古氏が作曲された作品集が残されており、参考までにと私にお送りいただきました。これは歌曲、合唱曲十四曲、器楽曲四曲から成る立派な作品集で、解説には、敬虔なキリスト教信者であった中瀬古先生の、「聖書が創作の根源であった」との信条のとおり聖書から題材やテキストが選ばれております。ただ、作曲技法としてはやはり前衛的で素人には難解に思えます。この作品集と比較しても山城高校校歌をいかに「一般的」に作曲されたかそのご苦労を伺う事ができそ

うです。

この作品集から古い記憶が蘇りましたが、私は中瀬古さんが一九五四年（昭和二十九年）作曲された男声合唱曲「隕（お）ちし星」を所有しておりました。これは、山城六回卒業生でＹＧＣ部員であった、故中村皓光君が早稲田大学入学と同時に東京男声合唱団に入団し、その団が中瀬古さんに作曲を委嘱された作品で後に音楽之友社から出版されたものです。やはり、聖書をテキストとした、前衛的な作品で、当時、このような曲が出版された事になみなみならぬ意欲を感じるとともに、私と校歌にまつわる不思議な縁に大きな感慨を覚えるものです。

京都府立京都第三中学校校歌

今では公式に歌われる機会が少なくなった京都三中校歌ですが、この校歌も大変味わい深いものがあります。

作詞は大塚五郎と示されており、四番に及ぶ大作ですのでここに紹介します。

一、朝に仰ぐ秀嶺愛宕　夕べに掬ぶ清流桂
　山河自然の霊気を受けて　集う双陵健児一千
　おお　三中　その名ぞ　我らが誇り

二、誠実天の聖火とかかげ　剛健地の威徳とたたえ
　崇文尚武ただ一途に　競う姿の雄々しさ看よや
　おお　三中　その名ぞ　我らが守り

三、進取不断の光と恃み　協同不壊の翼と張りて
若き命の日に新しく　理想の空ゆく羽音を聴けや
おお　三中　その名ぞ　我らが力

四、歴史はにほふ古き都に　繚乱誇る桜の徽章
護りてとはに祖国の幸を　拓かん我らが大なる使命
おお　三中　その名ぞ　我らがいのち

大塚五郎先生は一九二九年（昭和四年）に早稲田大学を卒業され、同年京都府立京都第三中学校に奉職されました。その後、一九四六年（昭和十七年）に京都府立嵯峨野高等女学校に転任されました。大塚先生は教育の傍ら、文学に勤しまれ、歌集「山原」、著書「嵯峨野の表情」、「京都風土記」、「続京都風土記」をはじめ多くの日本古典文学の注釈書を出版されています。

また、大塚五郎先生のご子息、大塚樹氏は京都三中第三十八回の卒業生で、この校歌制定の経過をよくご存知でした。大塚樹氏のご記憶では、この校歌は大塚五郎先生が中心になり、当時の先生方が知恵を絞って作詞されたそうです。ご謙遜とは思いますが、大塚五郎先生はその代表として作詞者にその名が挙げられているそうです。

それにしましても当時の日本は軍国主義が拡大中で、富国強兵が叫ばれていた時代でしたが、この校歌は京都の豊かな自然と古い文化を讃え、真理を究める若者の姿に満ち溢れた意気盛

んな力が感じられます。この歌詞を通じて、大塚先生はじめ、当時の先生方のリベラルな気風を伺い知る事が出来ると思います。

作曲は、当時すでに日本音楽界の大家であった信時潔氏の作品です。簡単に略歴を紹介しますと、一八八七（明治二十）年大阪府で生まれ、東京音楽学校器楽部、研究科、作曲部でチェロと作曲を学ばれ、長らく同校の教授を勤められました。氏はチェロと作曲の研修のため西洋諸国へ遊学されシェーンベルクやバルトークなど当時の現代音楽の知識も豊富でしたが、作品では、日本的情緒に基づくドイツ古典、ロマン派的簡素、重厚な作風を貫かれました。

校歌も数多く作曲されており、主なものだけでも、慶應義塾塾歌、北海道釧路湖陵高等学校、開成学園、甲陽学院、福岡県立筑紫高等学校、などおよそ千曲に上るそうです。

京都三中校歌の作曲依頼にも作詞者の大塚五郎先生のご尽力がおおきかったそうで、ご子息の大塚樹氏のご記憶では、早稲田出身の大塚五郎先生が信時潔氏と懇意な早稲田同窓生の方を通じて、特別にお引き受け願ったとの事です。

信時潔氏は氏の作品である、「海ゆかば」が軍国主義に利用されたことに対抗できなかったことを恥じ、戦後はほとんど作品を残さなかったと伝えられます。歌の持つ大きな力と、そう

であるからこそ、氏のお名前にふさわしい潔い生き様に深い感銘を覚えるものであります。

以上、京都三中、山城高校校歌はともに由緒深いいわれを持ち、時代を反映した立派な校歌であることをお伝えして、校歌を巡る断章を終わらせていただきます。

山城 14 回　岡本通雄